

楽

Sapporo Education and Culture Hall News

RAKU



〔特集〕

戦国武将たちが愛した能



札幌市教育文化会館

札幌市教育文化会館情報誌「楽(らく)」は舞台芸術を気軽に楽しんでいただきたいという思いを込めて名付けられました。



戦国武将たちが愛した能

古の時代から普遍的な物語りを現す伝統芸能

能のルーツは奈良時代に中国から伝わった散楽とされており、平安時代から江戸時代までは猿楽と呼ばれ時の権力者の庇護のもと発展。戦国時代には多くの武将達が能を嗜み、同時に援助するようになりました。

能の原型といわれる幸若舞の「人間五十年、下天のうちを比ぶれば夢幻の如くなり」という一節は、織田信長が好んだ謡として有名です。また、信長に代わって全国統一を果たした豊臣秀吉は、自分を主人公にした能を創作させ、自分が舞台で舞うほどのめり込みました。

その秀吉が才能を見出したのが喜多流の流祖北七太夫。小姓として仕えていた七歳の時に舞った能が秀吉の目に留まり、「七歳の太夫」が転じて七太夫と名乗ったと伝えられています。

北七太夫は秀吉亡き後の大阪夏の陣に豊臣方として参戦。大阪城落城後は身を潜めることになりました。

ところが敵方の徳川家康が発した「北七太夫の能がもう一度観たい」という一言がきっかけとなり、探したされ江戸に。

既にか家康は亡くなっており、二代目將軍・徳川秀忠から、徳川家に仕えるよう勧められました。しかし七太夫は「二君には仕えず」とこれを固辞。秀忠は諦めず「姓を喜多と改め、武士としてではなく能役者として仕えよ」と提案し、これを受け入れた七太夫は喜多流を

興すことになりました。

以降、三代將軍家光、十四代將軍家茂や幕末の大老井伊直弼らの手厚い支持を受け、武士道精神を持った質実剛健な能として現代まで受け継がれています。

秋の能楽公演「紅葉狩」では、激しい戦闘場面があります。多くの武士たちに愛された、喜多流ならではの能が楽しめるのではないのでしょうか。



紅葉狩（もみじがり）

【あらすじ】

秋も半ばに差し掛かった紅葉の美しい信濃国は戸隠山。鹿狩りに来た平維茂とその従者たちは、高貴な女性とその侍女たちの紅葉を愛でる酒宴の席に遭遇する。

女性に酒宴に誘われるままに、宴に加わる維茂一行。この世のものは思えない美しい女性たちの舞に見とれ、勧められるままに杯を重ねる維茂たちはいつしか酔いがまわり寝入ってしまう。

それを見た美女たちは「目を覚ますな」と言い捨てて山中へと姿をくらましていった。

すると、寝入ってしまった維茂の夢の中に八幡大菩薩の眷属・武内の神が現れる。そして、先ほどの美女たちが実は鬼神であることを明かし、神剣を授け鬼神を退治しよう神勅を伝える。

目を覚ました維茂の前に本性を現した鬼神たちが襲いかかって来る。維茂は神剣を抜き勇敢に応戦。壮絶な戦いの末、ついに鬼神を退治したのであった。

【解説】

「紅葉狩」はストーリーが進むにつれて、少しずつ状況が明らかになっていくというミステリアスな魅力を持つ能の演目です。

山がどこの山なのか、武人は誰なのか、美女たちは誰なのか、明らかにされないまま、中入りを迎えます。中入り後に「間狂言」として、武内の神が登場。舞台となっている山は鬼が住む山として知られる戸隠山であること、武人は勇猛を轟かす平維茂であること、美女たちの酒宴は鬼神の罠であることなどが次々に知られます。

中入り前の前場では、紅葉の美しさや優雅な舞で妖艶な世界を表現し、後場では「転して鬼神たちと平維茂との烈しい戦闘シーンを描く、スベクタクルな展開が「紅葉狩」の魅力のひとつと言えます。

また、酒宴の場で舞う優雅な「序ノ舞」が、維茂が寝入ったのを確認してから「急ノ舞」に急変したりと、前場でも所々に鬼の本性が現れるのも見所です。

能 五流派

観世流

有名な観阿弥・世阿弥親子を祖とする流派で、所属する能楽師は五流の中で最多。足利家や徳川家の庇護を受け、室町時代から流勢を伸ばす。優美な芸風で洗練された所作に定評がある。

宝生流

観阿弥の長兄・宝生太夫が流祖。徳川家康に召抱えられ、特に五代將軍・綱吉、十一代將軍・家齊は宝生の能を愛好したことで知られる。重厚な芸風と独特で繊細な謡が魅力で「謡宝生」と称される。

金春流

五流派の中で最も歴史の古い流派で、遠祖は聖徳太子に仕えた秦河勝とも言われている。豊臣秀吉・秀次親子に愛されるが、その分、江戸幕府との関係が薄かった。古風で素朴な芸風を今に留めている。

金剛流

鎌倉時代、奈良の法隆寺に仕えた坂戸座を前身とする歴史ある流派。金春流とともに奈良で活動していた時期が長く、型や所作に能の原始的な形を留める。優雅な舞が特徴で「舞金剛」と称される。

喜多流

五流派の中で最も新しい流派。流祖の北七太夫は一時期「金剛太夫」として金剛座の看板役者も勤めていた。謡、舞ともに軟弱を嫌い武道にも通じる剛健さが特徴的。

教文 秋の能楽公演

もみじがり
紅葉狩

能 喜多流
「紅葉狩」もみじがり
塩津 哲生、森 常好 ほか

狂言 大蔵流
「地藏舞」じぞうまい
山本 東次郎、山本 泰太郎



【日程】10月19日(火) 18:30開演 (17:45開場)

【会場】札幌市教育文化会館 大ホール

料金 (全席指定・税込)

S席：6,000円 A席：4,500円 学生：3,000円

自由席：1,000円 (2階席後方・限定100席)

【チケット取り扱い】教文ほか市内各プレイガイドにて発売中

【教文プレイガイド】tel.011-271-3355

【お問合せ】札幌市教育文化会館 事業課
tel.011-271-5822

教文ワークショップ レビュー

Kyobun Work Shop

02

演劇、オペラ、ダンス。知れば知るほど深まっていく舞台の世界。「観ているだけじゃつまらない」「実際に体験してみたい」そんな皆さまの好奇心にお応えするのが札幌市教育文化会館のワークショップです。



劇は全て即興。とにかく集中するため、あがっている暇がありません。



教文演劇フェスティバル2010 ワークショップ

あがり症克服レッスン

～もう大事な舞台であがらない～ [2010年8月2日、3日、7日]

人前に出て話したり仕事でプレゼンテーションをする時など緊張してうまく喋れないことはありませんか？

そんな「あがり症」を、即興劇という手法を用いて

自分自身を表現する楽しさを学ぶワークショップが行われました。

「上手に話さなきゃ」という場面になればなるほど、緊張が高まりドキドキしてしまつて話せなくなる…。そんな悩みを克服するために行われたのが「あがり症克服レッスン」。3日間のレッスン中、何らかの形で演劇に参加することで、あがり症の克服に挑戦するワークショップです。

その手法として用いられているのは「プレイバックシアター」という即興劇。参加者の一人が自分の体験や普段思っていることなどを話し、その話を元に演者(アクター)が即興で劇として再現します。そうすることで、話をした人(テラー)がその場面の自分を客観的に見ることができたり、観客の共感を得ることで心が満たされるという、独創的な演劇手法です。

ワークショップの参加者は「受付の仕事で緊張する」「人前に出るとあがつてしまう」という方ばかりですが、ゲームなどを通じ人前で大声を出す練習からスタート。互いに話をしたり聞いたりするのを経て、最終的にはアクターとして人の話を演じることを目指します。

「あがることは悪いことではありませぬ。上手くやろうと思うのは、それだけ心を入れているからなんです」と話す講師のムジカ研究所代表の山下由美さんも、以前は人前に立つと真っ赤になっていたそうですが、プレイバックシアターと出会ってからは「私があがり症だったとは、誰も信じてくれません(笑)」というまでに。

即興劇を創るために、テラーの話を実演に聞き、他のアクターがどう動きどんな台詞を口にするのかに集中するとあがることも忘れてしまうそう。参加者からも「課題に夢中で取り組んでいたら壁がとれた」「考える前に動かないといけないのであがる暇がない」という声があがっていました。



【講師】
ムジカ研究所
山下由美さん



声を出し体を動かすことで演劇のトレーニングになり、初心者でも演じることができるようになります。



今からでも間に合う！

教育文化会館のワークショップ・講座

かけ声オモシロ入門！

日程／平成22年10月31日(日) 14:00～15:30
会場／札幌市教育文化会館 研修室401
講師／金田一仁志(演出家・俳優)
参加料／2,500円
申込方法／電話にて受付中。定員50名(先着順)

「待ってました！」「日本一！」「ブラボー！」。劇の雰囲気盛り上げる大向こう(かけ声)をかけてみませんか？ 気軽に楽しみながら「かけ声」を出すことの魅力を発見する講座です。